也。其葉荇の如くして大、其花葉を布きて數重る。夏に當り晝花を開く。夜縮みて水に入る。晝亦た出づ。和俗、ひつじ草と稱す。上の說のごとく、未の時より花萎む故とも、又日の中開く故、晝の當時と云ふ心ともいへり。江湖に多し。

季題解說 池沼に生ずる多年生の水草、根莖は水泥底の土にありて多數の葉を水面に浮ぶ、葉は圓く基部は深く裂けて箭形をなす。表は深綠色なれど裏は淡紅紫色なり。夏日、泥中の地下莖より花梗を長く出して、大さ一二寸より三四寸の蓮に似て清秀なる白花を開く。この花朝に開き夕に閉づるより睡蓮と稱せらる。花の後實を結び、熟すれば自ら水中に沈むる作用をなす。

實作注意 和名を「未草」と云ふも未の刻（午後二時頃）より閉花するよりの意味にて、一に「龜蓮」「小蓮華」と云ひ、「子午蓮」と稱す。また花言葉に心の純潔を意味するも此花の清美を想はしむ。瓦鉢の水盤にも栽培され夏日の花として甚だ涼し。参照 河骨（カウボネ）

例句

睡蓮

睡蓮は皆花閉ぢつ宵の星　月斗（同人）

代々木艸苑

睡蓮や御緣日なる寺の池　美鄉（同）

睡蓮のこぞりしりぞく風のあり　野風呂（ホトヽギス）

睡蓮や御釣魚臺の札古りて　浪々（同）

燕子花（かきつばた）

杜若（かきつばた）　かいつばた　かほ花（ばな）　かほよ花（ばな）

古書校註

【年浪草】本邦古來燕子花を以て杜若となし、或は劇草を用て、加岐豆波太と訓ず、共に誤也。劇草は馬蘭、杜若は藪茗荷也。

【三才圖會】燕子花、其葉白菖に似て大也。色淡く、其花實共に白菖に似て、肥大なり。紫色を正とす。近頃淺紅の者。白色の者を出す。皆變種也。五月盛りとなす。又四時花を開く者あり。參州八橋（一）の產名を得たり。

【滑稽雜談】八雲御抄に曰、かほ花萬葉らつくしき花也。仙覺萬葉抄に云、かほ花は杜若也。皃鳥の啼とき、さけばかほ花と云ふ。

註（一）參河の國にあり。かきつばたの名所。伊勢物語にも見ゆ。

季題解說 形容溪蓀に似たれど全體に大形なり。池沼水邊の濕地等に生ずる多年生の草木、地下に長き根莖あり、葉は劍狀に叢生し、高さ二三尺、夏日叢葉の中央より花莖を出し頂に紫・碧・白・紅等の花を開く、亦あやめに似たり。

實作注意 一名「かほよばな」とあれど、「貌好草」は芍藥の異名なれば紛はし、又「杜若」の字を用ゐれども大和本草に依れば杜若は「藪茗荷」の稱なりとあり。参照 溪蓀（アヤメ）　花菖蒲（ハナシヤウブ）　白菖（シヤウブ）

例句

燕子花

切る人やうけとる人や燕子花　太祇（太祇句選）

燕子花咲や日照りの朝曇　浪化（浪化上人發句集）

かきつばた似たりや似たり水の影　芭蕉（續山井）

杜若

杜若われに發句の思ひあり　同（千鳥掛）

大江の宿り

杜若語るも旅のひとつかな　同（芭蕉翁全傳）

宗鑑舊蹟

有がたき姿拜まん杜若　同（泊船集）

手のとゞく水際うれし杜若　同（芭蕉句選拾遺）

簾まけ雨に提げ來る杜若　其角（五元集）

かきつばた疊へ水はこぼれても　同（同）

紫の蜘もありけり杜若　同（同）

澤瀉の鑓を引く也かきつばた　同（五元集拾遺）

島田の宿にある俗を訪ふ

やすき瀬を人に敎へよかきつばた　嵐雪（玄峰集）

咲中に紫ばかりかきつばた　來山（今宮艸）

朝酒やまだ兒起ぬ杜若　言水（俳諧五子稿）

かきつばた花あるうちは降れ曇れ　杉風（杉風句集）

日あたりや紺やの裏のかきつばた　許六（五老井發句集）

翡翠のまぎれて住歟杜若　桃隣（古太白堂句選）

足洗ふうちや釣瓶に杜若　也有（蘿葉集）

きつゝまだ馴ぬ袷やかきつばた　同（同）

行春の水そのまゝやかきつばた　千代女（千代尼發句集）

かきつばたべたりと鳶のたれてける　蕪村（句集）

宵々の雨に音なし杜若　同（同）

貧乏な御下屋敷や杜若　同（新五子稿）

五雲文臺開

京の水藍より出でゝ杜若　同（落日庵句集）

今朝見れば白きも咲けり杜若　同（同）

雨の日は行かれぬ橋やかきつばた　同（同）

かきつばたやがて田へとる池の水　同（同）

切る人の帶とらへけり杜若　同（同）

雨に倦く人もこそあれかきつばた　同（同）

泥の干る池あたらしや杜若　同（同）

かきつばた魚や過ぎけん葉の動き　几董（井華集）

等閑に杜若咲く古江かな　同（同）

かきつばた深く住む戸に鳴子哉　召波（春泥發句集）

鍵の手の寺前の池やかきつばた　同（同　）
寸瓶もてみやげにくれし杜若　同（同　）
杜若門から覗く賣屋鋪　同（同　）
女藺なら舟へと申せ杜若　同（同　）
かりそめに見て過がたしかきつばた　樗良（樗良發句集）
鼻紙に足ふく人や杜若　曉臺（曉臺發句集）
わりなきや道々開くかきつばた　同（同　）
昔女はらからすめりかきつばた　同（同　）
かきつばた穗麥の髪に立ならび　同（同　）
蝸越に使は來りかきつばた　蓼太（蓼太句集）
何鳥の冠に著せんかきつばた　同（同　）
人々の扇あたらし杜若　同（同　）
雨に人たちもとふるやかきつばた　白雄（白雄句集）
通ひ路に階子わたすやかきつばた　一茶（發句集）
杜若花のそばよりつぼみ哉　成美（成美家集）
廣澤や一輪見ゆるかきつばた　蒼虬（蒼虬翁發句集）
燈を見せて猶剪にくし杜若　梅室（梅室家集）
人について麥わけゆけば杜若　同（同　）
蚊のわかぬ池の淺みや杜若　吟江（推蔵日記）
杜若卍ほろりと開けたり　嘯山（新選）
古溝や只一輪の杜若　子規（全集）
三河路や名もなき橋の杜若　同（同　）
八橋を賣る茶店あり杜若　同（同　）
かきつばた咲くや水田の靄の中　同（同　）
杜若うつりて迅き流かな　泊月（ホトヽギス）
白になり紫になり杜若　默禪（同　）

参考　かきつばた　Iris laevigata. Fisch.（あやめ科）
水邊等に生ずる多年生草本なり、通常栽培せらるれども亦野生あり。高さ二三尺許、葉は廣き劒狀を呈し中央に隆起脈なく、鮮綠色にして柔かなり、夏日莖頭に數花を開く、紫色を普通とし、白色・閒色等の異品あり、外花蓋三片は橢圓形を呈して下垂し、内花蓋三片は狹くして立ち末端稍尖れり。

溪蓀（あやめ）　はなあやめ　紅眼蘭（こうがんらん）

古書校註

【年浪草】大和本草に曰、（略）本草綱目に二種あり、一種は池澤に生じ、根大にして葩（一）白く、節跡なる者白菖也。俗に之を泥菖蒲と謂ふ。一種は溪澗に生ず。根瘦せ赤く、節稍密なる者は溪蓀也。俗に之を水菖蒲と謂ふ。

註　（一）花。此の説（白菖）の部を參照すべし。

季題解説　通常人家に栽植さるゝ多年生の草本、地下莖は横臥して細長き劍狀葉を叢生す、その基部は紅色を帶ぶ。初夏の頃葉間より花莖を抽きて二三尺。頂きに通常二三の大花を開く、花は略花菖又は燕子花に似て碧紫色或は菫色にて優美なり。

實作注意　昔「あやめ」と呼びしは今の「しやうぶ」の事なれば本花と混同され易く、本花の稱へは「花あやめ」の略なり。紅眼蘭の稱あり。

參照　燕子花（カキツバタ）　花菖蒲（ハナシヤウブ）　白菖（シヤウブ）

例句

あやめ　片隅にあやめ咲きたる門田かな　子規（全集）

はなあやめ　花あやめ九條はむかし揚屋哉　月居（新選）

參考　あやめ Iris sibirica L. var. Orientalis Maxim.（あやめ科）山原に自生する多年生草本なれども、通常觀賞用として庭園に培養せらる。莖の高さ一二尺、葉は細長し。五六月頃葉中より莖を抽き頂に紫色又は白色の花を開く。外花蓋三片は下垂し大にして圓く其柄部に網狀脈を有す。內花蓋三片は花柱より長くして廣し。

花菖蒲（はなしやうぶ）　玉蟬花（ぎよくぜんくわ）　菖蒲園（しやうぶゑん）　菖蒲池（しやうぶいけ）　野花菖蒲（のはなしやうぶ）

古書校註

【滑稽雜談】大和本草に云、是れ和花にして花も葉も花あやめに似て大なり。燕子花より葉小なり。四月に花開く。紫白あり。水陸共に宜し。

季題解説　水邊の濕地に栽培せらるる多年草、地下莖より葉を出し、高さ二三尺に達す。葉は細長く劍狀に尖り、その基部抱き合ひて直立す。初夏の頃葉間に花莖を出してその頂に美しき大形の花を開く、色は濃紫・淡紫・白

斑等種々あり。

【實作注意】花容の似たるより溪蓀・燕子花と混同され易きも本花の葉には高き中肋の脈あれば、區別し得べし、此花古く「花かつみ」と稱せられたりとの說あれど、異說ありて定かならず。漢土にては「玉蟬花」と云ふ。

【參照】燕子花（カキツバタ）　溪蓀（アヤメ）　白菖（シヤウブ）

【例句】

花菖蒲

きる手元ふるひ見えけり花菖蒲　其角（五元集拾遺）
片隅に菖蒲花咲く門田哉　子規（仝集）
堀切や菖蒲花咲く百姓家　同（同）

【參考】はなしやうぶ Iris Kaempferi, Sieb.（あやめ科）水邊濕地に栽培せらるゝ多年生草木なり、高さ二三尺に至る、葉は劍狀を呈し、通常多少青みがゝりたる綠色をなし中肋隆起す、初夏の頃、葉中より一の莖を抽きて頂に花を開く、紫色その他種々あり、紫の外列片は圓大にして內列片は小なり、原種は山原の乾地に生じ赤紫色の花を開く、野はなしやうぶと稱す。

白菖（しやうぶ）

菖蒲（しやうぶ）　水菖蒲（みづしやうぶ）　あやめ　あやめぐさ

【季題解說】沼池水邊に自生する多年生の草本にして、南天星科に屬するもの。地下に長き根莖を匍匐し、年々之れより葉を簇生す、葉は劍狀にして明瞭なる中肋ある平行脈あり。大なるものは長さ四五尺に達するものあり、莖葉共に特種の芳香を有す、初夏簇葉の間に花軸を出して穗狀の淡黃小花を開く。

【實作注意】端午の節物として軒に懸け、或は菖蒲酒をつくり、菖蒲湯を立つるもの、古くは「あやめ」「あやめぐさ」と稱せられてゐしより、鳶尾科の「溪蓀」と混同され、又しやうぶの同音なるより、これも鳶尾科の「花菖蒲」に思ひ誤まられゐるものなれど、白菖は南天星科にて鳶尾科のものと異り美しき花を有つものにあらず、穗の如き小花を綴るばかりにて、其葉を端午に用ゐ或はそれより香水の原料を取る外、花を觀賞するものにあらず。

あやめ草足にむすばん草鞋の緒　芭蕉（鳥の道）
あやめ草加茂の假橋いま幾日　嵐雪（玄峰集）

などは白菖を詠めるものなり。又菖蒲の字を用ゐれども菖蒲實は「石菖」の稱なり。參照　燕子花（カキツバタ）　溪蓀（アヤメ）　花菖蒲（ハナシヤウブ）　人事—菖蒲湯（シヤウブユ）

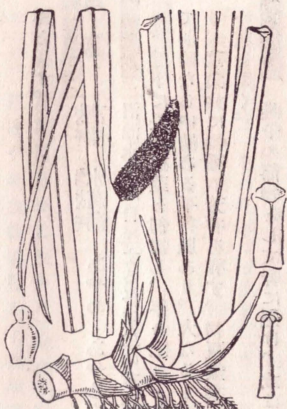
例句

菖蒲

澤にあるうちは名たゝぬ菖蒲哉　千代女（千代尼發句集）

引き盡す菖蒲の跡や田のつもり　桃隣（古太白堂句選）

菖蒲提げて女行くなり柳橋　子規（全集）

參考　しやうぶ Acorus Calamus. L. var. angustatus, Bess.（てんなんしやう科）池沼の水邊に生ずる多年生草本にして、地下に長き根莖を有し、年々之より劍狀の平行脈葉を簇生し、大なるものは長さ三四尺に達す。初夏、葉間に花軸を抽きて肉穗花序をなし、淡黃色の小花を着く。昔は之を「あやめ」と稱せり。

唐菖蒲（たうしやうぶ）　和蘭菖蒲（おらんだしやうぶ）　グラヂオラス

季題解說　舶來の多年生草「和蘭菖蒲」とも云ひ、一般に「グラヂオラス」として知らる。春日、地下の球莖より劍狀の葉を生じ、夏日葉間に花莖を抽くこと三尺、上部に多數の花を側方に向つて並び開く。紅色・淡紅色・白色等種々あり。參照　花菖蒲（ハナシヤウブ）　白菖（ハクシヤウブ）

例句

グラヂオラス

いけかへてグラヂオラスの眞赤哉　松葉女（ホトトギス）

石菖（せきしやう）　石菖蒲（いしあやめ）

古書校註　【滑稽雜談】時珍本草に曰、按るに臞仙神隱書に云ふ石菖蒲、一盆を几上に置き、夜間書を觀れば則烟を收めて目を害するの患なし。（略）四時ありて、最淸玩とす。夏に許用する事、新葉出る時をいふか。

季題解說　水邊の石間等に發生し深綠色にて冬も枯れざる多年草、往々庭園の雨落ち等に栽植せらるゝことあるもの。葉は劍狀に甚だ細く叢生す。初夏の候、葉間より花莖を出し、圓柱狀に淡黃色の小花を穗の如くつく。變種多く矮小種は夏期の盆栽として觀賞せらる。

栽作注意　此植物 菖蒲の如き香氣をもち 浴湯料に用ひらる。地下莖の乾燥